
TENDER ~ 1 2月の雨の日 ~

四弦 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TENDER ～12月の雨の日～

【Nコード】

N1023B

【作者名】

四弦 悠

【あらすじ】

愛をなくした犬・愛を知らない猫・そして愛をすてた墮天使。それぞれ形は違えど愛に関わって行く。それは12月のやさしい雨が降る1日

犬の場合その1（前書き）

この小説は、ストレイテナーというバンドの「TENDER」という曲を題材にして話を膨らませてみました。どちらかというとヒューマンぽくなってしまいますが、ストレイテナーのファンのかた、了承ください。

犬の場合その1

そこはいつも来るとてもとても広い芝生。僕はそこが大好きだ。今日もとても風が気持ちいい。

「さあ、ついたよ。好きなだけ走っていいからね！」

僕をようやく解放する強い力。そんなこと言っただけで、もう僕だつてずっと全力で走れるわけではないんだ。

「さあ、じゃあボール投げるからね。いくよおー！」

僕は反射的に追いかける、ボールが投げられた方向に全力で。息が切れそうになるのを抑えて、ボールを持って帰る。

「よし、いい子だね。」そういつて、おねえちゃんは僕を抱きしめる。そして、またボールを投げる。

ひたすらその繰り返し。疲れても繰り返し返す。

僕は何回だって、おねえちゃんに抱きしめてほしいから。

ガタン、とポストの小さな音が聞こえて目を開けた。いつもの朝、いつもの始まり。いつもと同じ夢。

また同じ夢を見た。毎日同じ夢。隣に住んでいる友達に言わせるとそれはとても変なことらしい。友達のご飯を食べたりといった夢を見るけど、毎日みることはないらしい。

「そんなに毎日遊ぶ夢見てたら疲れちゃうだろう」って友達は笑ってた。

疲れるといったことはないけれども、確かに毎日ため息をつく回数が多くなったかもしれない。

「おはよう、あんたはいつも朝早いわよねえ」

お母さんが起きてきた。すごく寒そうだ。僕はそんなこと思ったことはないんだけど。

「おはよう。やっぱりお前が起きるのが早いのか」

お父さんも起きてきた。お父さんはもつと寒そうにしている。

「やっぱり12月の朝方ともなると寒くてたまらないねえ」とお父さん。

「そうだよな。この子だけだよ元気なのは」と僕の頭を撫でながらお母さん。

少し眠そうなお父さんと僕は一緒に外に出て少し歩く。お父さんは本当に寒そうにしているけど。

帰ってくると朝ごはんのいいにおい。いつもと同じ朝。お父さんが出かける準備をする。

いつものようにあわただし朝。

いつものように玄関までお父さんを送りに行く。少し違うことといえは・・・

「なんだい？傘を持ってきて」

「お父さん、今日は雨みたいですよ。この子が持ってくるってことは確実ですよ」

「そうだったね。じゃあ一応持っていけますか」

傘を持ったお父さんは立ち上がって、僕の遥か真上から手を伸ばし僕の頭を撫でながら声をかけた。

「じゃあ、ムク。行ってくるよ」

ムク、それが僕の名前。雨のにおいがわかる、少し毛が多い犬。

お父さんが出て行った後、お母さんが台所で皿を片付けて洗濯物にとりかかる。お母さんも、最初は僕の雨の知らせを疑っていたが今や僕の知らせに従ってその日の洗濯物などの準備にとりかかる。

「今日は雨が降るっていうから、早めに出かけてくるよ」

そういつて、お母さんはせつせと準備をして出かけていってしまった。相変わらずの準備の早さと手の抜かなさだ。急に一人になったがらんとしたこの家。いつだって同じ風景。

もう慣れてしまったし、僕の体（というか犬はだが）は1日のほとんどもは寝ているのではないかといわれているみたいで、僕も例外ではない。眠い体を動かして2階にあがりいつものようにひとつの部屋のドアを空けた。そして、またいつものように持ち主がいらない布団に体を預けふうーっとため息をついて目を閉じる。

今日もおねえちゃんの布団で目を閉じた。

白い毛布に包まれるといつも思い出す。僕が始めて記憶を持ったとき、気がついたらそれまでも気持ちよかったのに急に本当のお母さんから引き離されてとてもせまい場所にいた。明るいんだけど本当にせまくて、それまで本当のお母さんや兄弟といたのに急に一人ぼっちになってしまった。なによりも驚いたのが、透明なガラス越しに見えた「ヒト」という存在。僕は本当に怖かった。

少し時がたって、壁越しに他の犬の存在に気がついた。ある犬は外に出たいと鳴き、ある犬はおかあさんと鳴き・・・似たり寄ったりな鳴き声。この声が僕を更にかきたて、僕はただ端っこで白い毛布につつまれながらブルブルしていた。

数日たって、知っている犬がどんどんいなくなった。ガラス越しに見える「ヒト」がなにやら話しかけるたんびにどんどん、犬がいなくなりそしてまた新しい犬が入ってくる。その繰り返し。そのいなくなる犬っていうのは、大体は茶色だったり白だったりの犬だったと思う。

一方の僕といえば、相変わらずこの環境になれることができない少し色がはつきりしない灰色で目を伏せがちで、端っこでブルブルしている犬だった。どうすれば、どうすればいいの？寂しい、怖い・・・ずっとそんなことを思っていた。そんな僕にガラス越しの「ヒト」はあまり足をとめることはなく、とつと茶色や白の犬を指差している。いつだって「ヒト」の声は聞こえてなかった。

その日も端でブルブルふるえながら過ごしているといつもと違う視線と気配を感じた。ちよっぴり目を上げてみた。そこには小さな女の子がいた。それはあまり変わらない光景だったけど・・・

その小さな女の子はじいーっと飽きることなく僕を見ていた。大体の「ヒト」は茶色やら白の犬に興味をもつものだとおもっていたのに、好奇心旺盛の目でじいーっと僕を見つめている。

ガラス越しに見える「ヒト」にほんの少し興味を持って少しガラス越しに近づいて小さな「ヒト」を見つめてみる。どのくらい時がたったんだろう。その小さな女の子がにっこり笑って後ろを振り返って大きな声を出していた。

「おとーさーん！！私、この子！！この子がいい！！」

今まで僕はガラス越しに「ヒト」の声を聞いたことがなかったのに、こんなにすっきりと聞こえたのは初めてだった。僕は少し驚きながらどうなるのか見ていた。

お父さんとよばれた「ヒト」が近づいてきて女の子と話始めた。

・・・どれどれ？この犬かい？？・・・

・・・うん！この子がいい！！！！・・・

・・・本当か？こつちには茶色い犬もいるんだよ？？・・・

・・・いやだ！！これじゃなきゃいやだ！！！！・・・

・・・やれやれ仕方ないね、もうわかったよ・・・

・・・お父さんありがとう！！！！・・・

・・・お父さんは、この子に甘いんだから・・・

僕はそのせまい場所から連れ出され小さな女の子の元につれていかれた。

正直いつて僕はそれでも不安だった。僕がこの小さな女の子に今までとは違う興味を持っていたけれども、また違う場所に連れて行かれることが不安で不安で仕方なかった。思い出すお母さんと離れ離れになった日。一人ぼっちの部屋。

だけど、連れられた場所はとても広く暖かった。暖かったのはうれしかったけど、今までとは違った広い場所にまた不安になった僕は白い毛布に包まれながらブルブルしていた。

・・・ねえ、お父さん？家にきたのにこの子まだ震えているよ？
？・・・

・・・仕方ないさ、新しい場所なんだし不安なんだよ・・・
そっかぁ。そうつぶやくと女の子は頭を撫でて僕を抱きしめてくれた。

今まで、感じたことがない胸から湧き上がるあつたかさを感じた。

女の子はそれだけでは飽き足らず、僕を見守るように自分の毛布をかぶって僕のそばにいた。

・・・そういえば、この子の名前はどするの？・・・
・・・んー。なんかムクつとしてるからムク！・・・

初めてこの子の声を聞いたときと同じ、とても透き通った声。

それを聞いた、その子のお父さんは単純だなんて笑いながらも納得していたみたいだ。

「ヒト」じゃなくて新しい「家族」になった時、僕は「ムク」という名前を与えられた。それがおねえちゃんや今のお父さん・お母さんとの始まり。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1023b/>

TENDER ~ 12月の雨の日 ~

2010年10月17日03時35分発行